

Title	知識論証に対するタイプA物理主義的応答
Author(s)	太田, 紘史
Citation	哲学論叢 (2010), 37: 94-105
Issue Date	2010
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/152058">http://hdl.handle.net/2433/152058</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 知識論証に対するタイプ A 物理主義的応答

太田紘史

## 1. 三つの反物理主義論証と二つの物理主義

心についての物理主義は、現代の多くの哲学者が受容している立場である。それは、心的なものとはすべて物理的なものに他ならず、非物理的な心の存在は認められないとする立場だ。だが物理主義は、意識に関する限り問題があるように思われる。その問題は、報告、記憶、注意、反省、内観、言語化、随意的制御といった、意識的な心的状態に典型的に見られる認知能力や行動傾向、すなわち**機能的特性(functional character)**に関するものではない。むしろそれは、赤いリンゴが見えるときのあの色の質感、鋭い痛みを感じるときのあの感じられ方といったものに関するもの、すなわち**現象的特性(phenomenal character)**に関するものであるとされ、「ある経験をするとはどのようなことか」として特徴づけられてきた(Nagel, 1974)。現象的特性は、クオリア、質的特性、感覚質、現象性などの様々な別名を持つ。いずれにせよ、この現象的特性に訴える三つの有名な反物理主義論証があり、これらに対してどのような態度をとるかが、物理主義のどのバージョンを採用するかというマニフェストになる(Chalmers, 2002)。

第一の反物理主義論証は、Levine(1983)の**説明ギャップ(explanatory gap)**に基づく論証だ。物理的なものをすべて説明すれば、認知能力や行動傾向の基礎となる機能はすべて説明され、それによって意識的な状態の機能的特性はすべて説明されるだろう。だがこの説明は、意識の現象的特性の説明を与えない。そして、物理的なもので説明されないものはそれ自体が物理的なものではないので、この世界には物理的でないものが存在することになる。こうして、物理主義は偽であるとされる。

第二はChalmers(1996)の**ゾンビ論証(zombie argument)**だ。我々は、意識の現象的特性を欠きながら我々と物理的に一切変わらない複製(「ゾンビ」)を思考することができる。そして、思考可能なものは形而上学的に可能である。それゆえ、現象的特性は物理的性質によって必然化されない。それゆえ、現象的特性はいかなる物理的性質と同一でもない。それゆえ、この世界には物理的でないものが存在することになる。こうして、物理主義は偽であるとされる。

第三はJackson(1982)の**知識論証(knowledge argument)**だ。色覚の神経メカニズムを含めてについてすべての物理的知識をもつ科学者メアリは、生まれて以来ずっと白黒の部屋で過

ごしている。そしてメアリはある日その部屋を出るとき、初めて赤を見て、「これが赤というもののね！」と驚く。ここでメアリはすべての物理的な知識を持っていたにもかかわらず、部屋を出るときに新たな事実を学んだ。それゆえ、物理的な知識から演繹できない知識が存在し、あらゆる知識が物理的な知識であるわけではない。非物理的な知識は、非物理的な事実に関するものである。それゆえ、非物理的な事実があることになり、物理主義は偽であるとされる。

Chalmers(2002)が指摘する通り、これら三つの反物理主義論証には共通の論証構造がある。それらはいずれも、まず**認識ギャップ(epistemic gap)**を確立しようとし、そしてこの認識ギャップから**存在ギャップ(ontological gap)**を導こうとする。認識ギャップとは、物理的な真理から現象的な真理が含意されないことであり、存在ギャップとは、現象的なものが物理的なものであることが否定されることだ。第一に説明ギャップ論証では、物理的なものが現象的特性を説明しないとす認識ギャップから、現象的特性は物理的なものではないとする存在ギャップが結論される。第二にゾンビ論証では、ゾンビが思考可能であるとする認識ギャップから、ゾンビが形而上学的に可能であり、それゆえ現象的特性が物理的なものと同一ではないとする存在ギャップが結論される。第三に知識論証では、物理的知識が現象的知識を含意しないという認識ギャップから、非物理的な事実があるとする存在ギャップが結論される。

物理主義は、これら三論証に応答しなければならない。**タイプ A 物理主義(Type-A physicalism)**は、三論証で描かれる認識ギャップと存在ギャップの両者を否定する。それによれば、物理-機能的なものをすべて説明すれば意識に関して説明されるべきものはすべて説明され、またゾンビは思考不可能であり、そしてメアリは解放前からすべての事実を知っている。他方で**タイプ B 物理主義(Type-B physicalism)**は、認識ギャップを認めるが存在ギャップを否定する。それによれば、説明ギャップがあること、ゾンビが思考可能であること、メアリが解放時に新たな事実を知ることは認められるが、これらが存在論的含意を持つことはない。

極端な応答をなすタイプ A に対して、認識ギャップに対する直観的是認に基づいたタイプ B 応答は自然なものであり、そのため多くの物理主義者はタイプ B を採用する。その基本的な戦略は概して次の通りだ。第一に説明ギャップ論証に対して、一般に同一性に説明は不要であり、この点は現象的特性と物理的性質の間についても成り立つと応答する。第二にゾンビ論証に対して、思考可能性は形而上学的可能性を含意しないので、ゾンビの思考可能性は現象的特性の存在論的身分について含意をもたないと応答する。第三に知識論証に対して、メアリは物理的知識によって知られていた事実を新たな仕方でも知ったにすぎ

ないと応答する。

私は、物理主義内部において少数派であるタイプ A を支持する。私は今回、知識論証に焦点を当てよう。というのも、知識論証の思考実験は、他の二つの論証に重要な前提を与えるからだ<sup>(1)</sup>。もしもその思考実験が示唆する通り、メアリが解放時に何かしら新たな知識を得るのであれば、物理的に全知のメアリは物理的特性 (P) に関する知識から現象的特性 (Q) に関する知識を演繹できず、それゆえそれらの知識の接続はせいぜいアポステリオリである。そしてそれがアポステリオリであることは、 $P \rightarrow Q$  の否定、すなわち  $P \wedge \neg Q$  (ゾンビ世界) が思考可能であることに他ならない。こうして、知識論証の思考実験は、ゾンビ論証の前提を与える。事実 Chalmers(2004)は、知識論証がゾンビ論証に平行する論証の前提を与えることを示している。McGeer(2003)が述べる通り、知識論証は「データを与え」、様相論証はこのデータからどのように「推論」するかを実質化するのだ (p.387)。またその思考実験が説明ギャップと密接に関わることも明らかだと思われる。というのも現象的知識と物理的地域の接続がアポステリオリであることは、それが我々は現象的特性について還元的説明を与えることができないことを意味する<sup>(2)</sup>。これらの点を踏まえると、知識論証の思考実験を無効化するのが物理主義者にとって得策だろう。

私は2節で、知識論証に対するタイプ B の応答が不全に陥ることを示す。3節ではこれを踏まえて Dennett 流のタイプ A 応答を検討するとともにその核心的な考えを抽出する。4節ではいくつかの反論を検討する。私の結論は、知識論証は何も示しはしないということだ。

## 2. 知識論証に対するタイプ B 応答の不全

知識論証に対してタイプ B は、いわゆる旧事実／新様式戦略(Old-Fact/New-Way Strategy)を展開する。メアリは解放前に赤を見ることにまつわるあらゆる事実について物理的記述を通じてすべて知っており、解放時には同じ事実を実際に経験することで知ったのだ。そうならば、メアリは新たな事実を知ったわけではない。すなわちメアリは、すでに知っていた物理的事実に、新たな呈示様式でアクセスしたのだ。この呈示様式をもつ概念は**現象的概念**と呼ばれ(Loar, 1990/1997)、これに基づく信念や知識は現象的信念や現象的知識と呼ばれる(Nida-Rumelin, 1995)。こうして、メアリが現象的知識を獲得することは、メアリが非物理的事実を知ったことを含意しない。そうタイプ B は論じる。

Loar によれば現象的概念とは、実際に経験するときその経験に対して適用されるような直示的概念である。それは、指示対象それ自体が呈示様式であるような概念であり、いわば「直接的に」対象を指示する。ただ、その対象はあくまでも物理-機能的性質である。

こうして、この概念によってピックアップされるものが、経験と同一視される物理的性質であるとする余地が生じ、知識論証の前提から結論へのステップが阻止されるという。現象的概念は、一人称的な観点に由来する概念であり、このように感じられるという概念だ。重要なのは、それが科学理論の供給する物理-機能的な概念から独立であるという点だ。さて、現象的特性がこのような意味で認識的に非物理的であるのに対して、現象的概念はどのような認識的身分を持つのだろうか。(なお、もちろんいずれも存在論的には物理的であるとされる。)

一方で仮に、現象的概念が認識的に非物理的であるとしよう。だがそうだとすると、現象的概念は役に立たない。我々は現象的概念によって、現象的特性がいかんして認識的に非物理的でありながら存在論的に物理的であることを説明することができるかもしれないが、目下まさにその現象的概念が認識的に非物理的かつ存在的に物理的であり、今度は現象的概念がいかんして認識的に非物理的かつ存在的に物理的であることを説明しなければならず、問題が繰り返される。

他方で仮に、現象的概念が認識的に物理的であるとしよう。だがそうすると、今度は現象的特性が認識的非物理性を失う。目下の仮定では、現象的概念は水概念と同様に認識的に物理的である。するとメアリは、完全な物理的知識から水概念を獲得するのと同じように、メアリは完全な物理的知識から現象的概念を獲得する。するとメアリはもはや解放時に赤を見ても、新たなことを何も学ばない。それゆえ、現象的特性の認識的非物理性が否定される。これはタイプ B を否定することに他ならない。おそらくタイプ B は次のように応答するだろう。メアリが白黒部屋で教科書を通じて赤の現象的概念について学ぶことと、我々が経験を<sup>2</sup>を通じて赤の現象的概念を獲得することには何らかの重大な差異があるので、メアリはやはり解放時に新たな概念を獲得するはずだ。この応答によれば、現象的概念の一人称的な獲得には三人称的な獲得と異なる。だがそうだとすると、現象的概念が認識的に非物理的であるということに他ならない。これは第一の選択肢へと崩壊する<sup>(3)</sup>。

タイプ B の問題は結局、認識ギャップを認める点にある。そしてそのために、現象的概念と機能的な概念を排他的なもののみならず、それら二つを通じた排他的な認識ルートを認めてしまう点にある。現象的概念という考えは多くのタイプ B 論者によって、一連の反物理主義的論証に対処するための有効と見込まれている。だが、現象的概念と機能的な概念を排他的なもののみならず限り、私にはそのように思われない。

おそらくタイプ B 物理主義者は、いまだ反論する余地が残されていると言うだろう。だが私は本稿では、タイプ B 応答の可能性を検討するよりも、私が支持するタイプ A 応答の可能性を探りたい。

### 3. 知識論証に対するタイプ A 応答を探る

知識論証に対して提案されるべきタイプ A 応答は、前節ですでに示唆されている。それは、現象的概念戦略をタイプ A 流に修正することだ。現象的概念は認識的にも存在論的にも物理的である。それゆえ、物理学的に全知のメアリはそれを獲得している。それゆえ、メアリは解放時に何も新たなことを学ばない。そう私は主張する。

これは Dennett(1991)の対抗的な思考実験「ブルーバナナ・シナリオ」に他ならないと私は考える。Dennettによれば、このシナリオは次のように進行する。すべての物理的真理を知るメアリは、それから含意されるすべての機能的・表象的真理をも知るだろう。ならばメアリは、自身が青を見せられるときに、どのような思考や感情や行動傾向が自身に降りかかってくるかも知っているはずである。メアリの監禁者たちはメア리를だましてやろうと青いバナナを見せることを画策する。だがメアリは実際に青いバナナを見せられるとき、彼女には以前に自身が予想した通りの反応が生じ、彼女はそれに基づいてそのバナナが青色だと適切に識別する。その識別能力は、常人との差異がなくなるまでに洗練されている。「あら、あなた、私をだまそうとしてるでしょう。バナナは黄色のはずなのにこれは青いじゃないの！」(Dennett, 1991, p.399) こうして物理的に全知のメアリは現象的知識を演繹できるのだ。これは知識論証における認識ギャップの否定に他ならない。

彼の対抗的な思考実験はこれにとどまらない。Dennett(2005)は「ロボメアリ」のシナリオによって、さらに我々の直観に揺さぶりをかけようとする。ロボメアリは、白黒カメラしか装備しておらず、いまだ色を見たことがない。そこで彼女は、自身が色を見るであろうときにどのような状態に至るかについてすべてモデル化し、その状態へと自身を調整する。こうして、彼女は自身の白黒カメラを色カメラに置換して実際に色を経験してみても、驚きすらしないのだ。

私は見るところ、ブルーバナナ・シナリオもロボメアリのシナリオも、本質的なところは変わらない。いずれにおいても彼女らはまず、自身が色を見るときにどのような反応をするかをすべて物理的知識から演繹する。そして前者の場合は、色を見るときに自身に降りかかる一連の行動傾向に基づいて識別能力を達成し、後者の場合は、色を見るときの自身の状態へと自身を調整することによって現象的知識を獲得するのだ。

私の見るところ、以上の一連の対抗的思考実験の背後にあるのは、次のような考えであるはずだ。

- (1) メアリはすべての物理的知識をもつならば、すべての機能的知識をもつ。

- (2) メアリはすべての機能的知識をもつならば、すべての表象的知識をもつ。  
 (3) メアリはすべての表象的知識をもつならば、すべての現象的知識をもつ。

——  
 メアリはすべての物理的知識をもつならば、すべての現象的知識をもつ。

(1)に問題はないはずだ。メアリはすべての物理的特性についての知識を持つならば、それらが一連の因果的役割を占めることを演繹することができる。これを拒否することは、機能的特性に関する物理主義が偽であると想定することに他ならない。(2)にも問題はないはずだ。メアリはすべての機能的特性についての知識を持つならば、特定の機能的状態にある人が、どのような表象状態にあるかも演繹することができるはずだからだ。これを拒否することは、表象的特性に関する機能主義が偽であると想定することに他ならない。そして、同様のことは(3)についても言える。(3)にも問題はないはずだ。メアリはすべての表象的知識をもつならば、特定の表象状態にある人が、どのような現象的状态にあるかを演繹することができるはずだからだ。これを拒否することは、現象的特性に関する表象主義が偽であると想定することに他ならない。こうして(1)(2)(3)という三つの前提のもとでは、メアリは現象的知識を持つことができる。それを具体化したものが、ブルーバナナ・シナリオとロボメアリ・シナリオに他ならない。

これから分かる通り、実は、メアリが解放時に何か新たなことを学ぶというオリジナルの思考実験はとてまたくさんの哲学的立場を拒否することに基づいている。その立場とは、現象的特性に関する表象主義、表象的特性に関する機能主義、そして機能的特性に関する物理主義である。これら三つの立場の連言は、現象的特性に関する物理主義を含意する。それゆえ、オリジナルの思考実験は、実は現象的特性に関する物理主義を否定することを前提として初めて成り立つ。だがそれは、そもそも結論として示すはずだったことに他ならず、論点先取でしかない。

#### 4. タイプ A 応答への反論に対処する

##### 反論 (1) タイプ A 応答はあまりにも反直観的だ？

タイプ A 応答が描く対抗的思考実験は、ただ反直観的という理由からまともに相手にされないのが通例であり、批判されるとしても大抵は次のように言われるだけだ——彼女らが自身の色経験における反応をアプリオリに演繹したところで、それを知ることは現象的知識を得ることとは異なる。物理的知識と現象的知識の間にはアプリオリな接続はないは

ずであり、それゆえ現象的知識は物理的知識から演繹不可能である。それゆえ一方でブルーバナナ・シナリオは、現象的知識の演繹可能性を措定する点で論点先取である。他方でロボメアリのシナリオは、現象的知識の獲得を示してはいても、現象的知識の演繹可能性を示していない。このようにして多くの哲学者は、このシナリオを簡単に棄却する。

たしかに我々においては、物理的知識から現象的知識を演繹することは実践的には難しい。だが私には、どうして我々からメアリへの外挿が許されるのか、そのような外挿こそ論点先取ではないのか、そして直観以外にそれを支持する議論はあるのかという疑問が生じる。だがあえて私は彼らの言い分を聞き、タイプ A 応答を前進させてみせよう。

彼らによれば、現象的知識が演繹不可能であるのは、物理的知識と現象的知識の接続がアプリアリではないからだという。では、知識接続のアプリアリ性はどうやって検証すればよいのか？ その答えは反物理主義者の Chalmers & Jackson(2001)が示してくれている。彼らは説明ギャップを巡ってタイプ B に応答する文脈で、アプリアリ性は理想的状況で検証されなければならないと主張する。理想的状況とは、「記憶・注意・推論などといった偶然的な認知的制約」(p.334) から解放されるような状況だ<sup>(4)</sup>。この点を考慮に入れてメアリについて再考しよう。

我々の目下の課題はメアリの物理的知識と現象的知識にアプリアリな接続を与えてやることだ。我々はただこう言えばよい——物理的知識と現象的知識の間にアプリアリな接続が成り立つようになるまで、メアリを偶然的な認知的制約から解放せよ！メアリの脳はすでに、物理的全知という（常人の脳が開発するスパコンなど足元にも及ばないような）凄まじい認知的無制約のもとにあることに気づかれない。ならば理想化を徹底して、メアリからあとわずかだけ認知的制約を解除してやればよい。すなわち、物理的知識と現象的知識の非接続から彼女の脳を解放してやるのだ。これがどのような神経メカニズムによって実現できるのかはもちろん私には分からないが、目下必要なのは原理的可能性だけであるのは言うまでもない。物理的知識や現象的知識といえども、それは脳状態に相関する心的表象なのだから（これは反物理主義者も認めるはずだ）、物理的知識の脳状態と現象的知識の脳状態を接続するような信頼可能なメカニズムを、メアリは生まれながらに備えているのだと理想化すればよい。こうしてメアリはブルーバナナ・シナリオでハッピーエンドを迎える。

あなたはこう思うかもしれない——そのような「エンハンスメント・メアリ」は我々と同じやり方で現象的知識を得るわけではなく、いわば「反則」である。神経エンハンスメントを被った彼女はもはや我々と同種の間人ではなく、そのような思考実験から我々の現象的特性について結論をすることはできない、と。



私はこのように応答しよう。第一に、メアリは我々常人と同じやり方で現象的知識を得なければならぬとすることは、彼女に対して現象的知識を演繹してはならないと最初から要求する論点先取でしかない。第二に、神経エンハンスメントが反則だと主張することも論点先取に陥る。そもそもの思考実験はアプリオリ性を問うための理想化としてメアリに物理的全知を与えており、それゆえ彼女はこの凄まじい認知的無制約のために、すでに極度の神経エンハンスメントを被っていることに気づかれない<sup>(5)</sup>。ならばなぜ、物理的全知を許すようなエンハンスメントという理想化は「セーフ」で、物理的知識と現象的知識の接続を許すような生得的エンハンスメントという理想化は「反則」なのか？ もはや言うまでもないが、後者を排除して前者だけを有効とするのは、現象的知識の演繹不可能性をあらかじめ想定することでしかない。(さらに一点追加しておこう——Chalmers & Jackson が偶然的認知的制約の一種に推論能力の制約を含めていたことを思い出されたい。)

結局私の診断は次の通りだ。メアリが物理的に全知であると言われながら、我々はメアリを生身の人間のように想像し、そのために、メアリが解放時に新たなことを知るだろうと無反省に想像してしまう。この思考実験の巧みさは、まさにこのような無反省の想像を誘発するところにあり、この点で類例を見ない直観ポンプの最高傑作だ。我々は、物理的知識と現象的知識のアプリオリな接続を検証するためにメアリを理想化するはずだったにも関わらず、その想像においてうっかり彼女に偶然的な認知的制約を課してしまいがちである。だがこれは、我々が適切にメアリを想像していないだけの話なのだ<sup>(6)</sup>。

我々はメアリを想像するなら、本気で想像しなければならない——認知的制約から解放されたメアリを。そのような凄まじい無制約下にあるメアリなど想像できないだろうか。それならなぜあなたは、物理的全知という凄まじい無制約下にあるメアリならば想像できるのだろうか。あなたは、自分の想像に論点先取的な前提を持ちこんでいないだろうか。

我々はメアリと違い生身の人間として、様々な偶然的な認知的制約を抱えている。そして、そういった能力の不足に由来する現象に直面して、つい新奇な存在者を補填してしまう。だが我々は自らの偶然的な認知的制約を、アプリオリ性に関わるはずの認識ギャップと混同してはならないし、ましてや存在者の補填によって存在ギャップをこしらえてはならないのだ。

## 反論 (2) アプリオリな演繹は不可能だ？

Alter(2010)は、Dennett のタイプ A 応答を次のように批判する。知識論証が示そうとすることは、現象的知識をアプリオリに演繹することが不可能だということであって、それ自体は現象的知識が神経エンハンスメントで得られることと整合的である。それゆえ反物理

主義者は、ロボメアリが現象的知識を得ることに同意し、そしてそれ自体はアприオリな演繹不可能性に関わらないと応じるのだ。

Dennett はこれに対して、演繹とそれ以外の仕方による現象的知識獲得の差異を認めないと応答する。だが私の見るところ、タイプ A 物理主義者はそのような譲歩をする必要はない。ロボメアリはアприオリに現象的知識を演繹できると主張すればよいだけであり、事実 Dennett の最初の思考実験はまさにそれを主張していたはずだ。この点を明確化しよう。メアリは、物理的知識を使って、赤を見る人や赤を見たことのある人がどのような物理的状态にあるかをすべて知っており、それから彼らがどのような機能的状態・表象的状态にいるかをアприオリに演繹している。それゆえメアリは、そういった人がもつ「赤を見るとは...のようなことだ」という知識状態にあることをアприオリに演繹している。ならばメアリは、「赤を見たことのある人は、赤を見るとは...のようなことだということを知っている」という命題から、「赤を見るとは...のようなことだ」という命題を演繹するだろう (Mandik(2009)はこの演繹シナリオを再構築する試みを示している)。このように Alter の批判はすでに最初のブルーバナナ・シナリオの時点で克服されている。

他方で Alter は、一体どのような根拠に基づいて現象的知識の演繹不可能性を支持しているのだろうか。

だが、メアリが解放前に得る情報を組み合わせて赤を見るとはどのようなことかを演繹できないというのは、相変わらず直観的にもっともらしい。これはロボメアリについてもあてはまる。彼女は赤を見るとはどのようなことかを把握するけれども、その推論には物理的情報からのアприオリな演繹以外のものが関わっている。(Alter, 2010, p.245)

こうして直観的もっともらしさ以外に演繹不可能性を支持する理由はないわけだ。だが私はもはやその直観を共有していない。演繹不可能性の支持者は、自身の陣営内部でだけ共有される直観以上のものを示さねばならない。私の考えでは、タイプ A への反論者は、おそらく直観を越えた根拠を示すことができるかもしれない。これを次に検討しよう。

### 反論 (3) 記述不可能性はアприオリな演繹を不可能にする？

現象的特性は記述不可能(ineffable)であるとよく言われる。

我々には、現象的な質を記述するための独立した言葉はない。(中略)そこには記述

不可能な何かがある。緑というのは、豊かな内在的特性を備えた、他とはっきりと異なる感覚ではあるが、それが緑であるということ以外には、それについて言えることはほとんどない。現象的質について語るとき、我々は当の質をそれに伴う外在的性質や因果的役割で特定しなければならない。現象的質に対する言語は、非現象的な言語に由来するものである。ライルが言う通り、「じっくりいく」感覚語はないのだ。  
(Chalmers, 1996, p.22)

このように現象的特性が記述不可能であるならば、言語的に表現された物理的知識から現象的知識を演繹することはできないだろう。そう反論は進行する。

だが、言語的に表現不可能であるということは、それ自体が一種の認知的制約であることに気づかれない。たしかに、私は現在の視覚シーンのすべての情報を言語化することができない。その意味では私の視覚的意識の現象的特性は記述不可能である。だが、現象的特性を実践的に言語化できないということと、原理的に言語化できないということとを混同してはならない。そしていったん記述不可能性が認知的制約でしかないという同意が得られるならば、あとは、メアリをその認知的制約から解放してやればよいだけだ。

この点を具体化するストーリーは複数あるだろう。私は一つのシナリオを示唆しよう。まず、現象的特性が脳状態の性質や環境的性質を含めた物理的性質に相関することは、性質二元論者ですら受け入れるだろう。ならば物理的に全知のメアリは、自身が青いバナナを見せられたときの現象的特性に相関する物理的性質の一切をも知っているはずである。ならば言語化能力を強化されたバージョンのロボメアリは次も知っているはずである——自身がどのような仕方で色を言語化するであろうかを。例えば、青いバナナを見るとき、視野の第 10000003 ピクセルの色は色標本 602947 番に一致し、第 10000004 ピクセルは...といった仕方で、自身が視野をスキャンして言語化するであろうことを、ロボメアリはずで知っている。彼女はこういった言語化データベースを、世界におけるあらゆる物理的対象の視覚経験について構築する（もちろん実際に視覚経験をもつことなしに）。そして解放時に監禁者によってバナナを見せられるとき、まさにこのスキャンを行い、データベースに照らしてそれが青色であることを瞬時にして判断するのだ。このデータベースこそが、彼女の現象的知識に他ならない。

#### 反論 (4) ブルーバナナ・シナリオは論点先取だ？

最後に、私が重要だと思う反論を検討しよう。それによれば、これまでのいずれの変則的シナリオも物理主義的な想定に基づいており、論点先取に陥っている。というのも、い

ずれのシナリオにおいても、メアリが偶然的認知的制約を解除される時、彼女には現象的知識を演繹可能にするような能力が与えられている。だがそれは、現象的特性についてのタイプ A 物理主義をあらかじめ想定しているだけである。このように反論は指摘する。

私にはこの指摘を受け入れる用意が十分にある。それどころか、このように言わせることこそがタイプ A 応答が意図するところだと私は考える。そもそもの理想化において、メアリの認知的制約をどこまで解除するのかを設定するとき、現象的知識の演繹を可能になるまでに理想化することも、それを不可能なままにしておくことも、どちらも論点先取的な前提にしかならない。我々は、エンハンスメントを「反則」と考えるならば、メアリは現象的知識を演繹できず、反物理主義が帰結するだろう。他方で我々は、エンハンスメントを「セーフ」と考えるならば、メアリは現象的知識を演繹でき、物理主義が帰結するだろう。そして、ただそれだけのことである。知識論証は、何も示しはしない。

私の論点は、私が描いた続編ストーリーから、メアリが何も学ばないことが証明されるということではない。むしろ私の論点は、このストーリーが想像させるような普通の仕方からでは、彼女が何かを学ぶということは証明されないということである。それは何も証明したりはしないのだ。それは単に、前提から要求されることとは別のものを想像させることによって、彼女が何かを学ぶだろうという直観（「まさに明らかに思われる！」）を汲みあげるだけである。(Dennett, 1991, p.400)

この状況は一体誰にとって都合がよく、誰にとって都合が悪いのだろうか。タイプ A 物理主義者はこの状況によって積極的に優位になるということはないだろう。だがこの状況は、反物理主義者の立場を劣勢にすることは間違いない。反物理主義者には、自身の立場を積極的に支持する実証的証拠というものがない。それゆえ彼らは、思考実験に訴えることで同意を得ようとする。だが今回の議論が正しければ、実証的証拠はおろか思考実験すら、反物理主義を支持しない。そして物理主義者としてはそれで十分であり、この道を開くことこそタイプ A 物理主義の眼目なのだ<sup>(7)</sup>。

## 註

(1) 「二つの論証の組み合わせはおそらく最も強力であり、我々は、[現象的特性が物理的特性に] 論理的に付随しないことを知識論証によって説得的に確立し、これから唯物論が偽であることへのステップを様相論証によって説得的に示すことができる。」(Chalmers, 1996)

(2) 還元的説明はいわゆる DN モデルに従った科学的説明でしかなく、科学的説明一般には関係がないと思われるかもしれない。だが実際には、他の種類の科学的説明のモデルに沿って考えても、還元的な科学的説明を特徴づけることはでき、それらは何らかのアプリオリな演繹を要求する。Carruthers(2004)を見よ。

- (3) これと似た論証は Chalmers(2006)において提案されている。だが、Chalmers は彼の論証をゾンビが現象的概念を欠くかどうか、またゾンビメアリが現象的概念を欠くかどうかといった思考可能性に訴えているのに対して、私の論証は端的に現象的概念に対する概念分析に基づいており、理論的負荷が圧倒的に少ない。この点ゆえに私の論証は、Levin(2008)といったタイプ B 論者による Chalmers に対する反論に耐える。
- (4) 反物理主義者はこのアプリオリ性の理解を取り下げられない。なぜなら、(1) 反物理主義的論証の成功は、P と M の接続がアプリオリであることと、P と Q の接続がアポステリオリであることに基づいており、そして (2) P と M のアプリオリな接続が実践的に困難であることに直面して、Chalmers & Jackson はこのようなアプリオリな接続の理解を支持しているからだ。
- (5) なお、この点を否定することは、最初から反物理主義を想定することにしかない。人間の脳が神経エンハンスメントなしに物理的全知に至るとするのは、その時点で物理主義的世界の人間の脳の制約を犯してしまっているからだ。)
- (6) 私が今回示した議論は、Dennett(2005)が展開した複雑な一群の思考実験と本質的に同じ戦略に基づいたものだとは私は考える。Dennett を越えて私が新たに指摘したことは二点だ。それは第一に、アプリオリ性を問うための理想化の点から神経エンハンスメントが「セーフ」であると言えること（もしくは理想化が恣意的にしかないということ）であり、そして第二に、メアリが解放時に何かを学ぶだろうと我々が愚かにも想像してしまうことの心理的背景の解明だ。
- (7) 本稿は、2009年7月に京都大学で行われた Yujin Nagasawa 氏（パーミンガム大学）のセミナーでの口頭発表に基づいている。Yujin Nagasawa 氏、佐金武氏（大阪大学）・山口尚氏（京都大学）には、重要な示唆を数多く頂いたことを感謝する。

#### 文献

- Alter, T. (2008). 'Phenomenal Knowledge Without Experience,' In E. Wright (Ed.), *The Case for Qualia*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Carruthers, P (2004) 'Reductive Explanation and the 'Explanatory Gap,' *Canadian Journal of Philosophy*, 34, 153-74.
- Chalmers, D. (1996). *The Conscious Mind*, Oxford and New York: Oxford University Press.
- (2002). 'Consciousness and Its Place in Nature,' in D. Chalmers (Eds.), *Philosophy of Mind: Classical and Contemporary Readings*, (pp.247-72), Oxford and New York: Oxford University Press.
- (2004). 'Phenomenal Concepts and the Knowledge Argument,' in P. Ludlow, Y. Nagasawa and D. Stoljar (Eds.), *There's Something about Mary: Essays on Frank Jackson's Knowledge Argument Against Physicalism*, (pp. 269-98), Cambridge: MIT Press.
- (2006). 'Phenomenal Concepts and the Explanatory Gap,' in T. Alter and S. Walter (Eds.), *Phenomenal Concepts and Phenomenal Knowledge: New Essays on Consciousness and Physicalism*, New York: Oxford University Press.
- Chalmers, D. and Jackson, F. (2001). 'Conceptual Analysis and Reductive Explanation,' *Philosophical Review*, 110,315-61.
- Dennett, D. C. (1991). *Consciousness Explained*. Boston, MA: Little Brown.
- (2005). *Sweet Dreams: Philosophical Obstacles to a Science of Consciousness*. Cambridge, MA: MIT Press
- Jackson, F. (1982). 'Epiphenomenal Qualia,' *Philosophical Quarterly*, 32, 127-36.
- McGeer, V. (2003). 'The Trouble with Mary,' *Pacific Philosophical Quarterly*, 84, 384-93.
- Mandik, P. (2009). 'Swamp Mary's Revenge: Deviant Phenomenal Knowledge and Physicalism,' *Philosophical Studies*, 148(2), 231-47.
- Nagel, T. (1974) 'What Is It Like To Be a Bat?,' *Philosophical Review*, 83, 435- 50.
- Nida-Rumelin, M. (1995). 'What Mary Couldn't Know,' in T. Metzinger (Eds.), *Conscious Experience* (pp. 219-41), Exter: Imprint Academic.
- Levin, J. (2008). 'Taking Type-B Materialism Seriously,' *Mind & Language*, 23, 402-25.
- Levine, J. (1983). 'Materialism and Qualia: The Explanatory Gap,' *Pacific Philosophical Quarterly*, 64, 354-61.
- Loar, B. (1990). 'Phenomenal States,' *Philosophical Perspectives*, 4, 81-108. Reprinted in N. Block, O. Flanagan, and G. Güzeldere (Eds.), *The Nature of Consciousness: Philosophical Debates*, (1997, pp.597-616), Cambridge, Massachusetts: MIT Press, 1997.

[京都大学大学院博士課程・哲学／日本学術振興会特別研究員]